

しゃりん

16

2008/3



恩という字は、
因と心からなっている。

今、私がここにいる因に
心を寄せるとき、
数々の恩を感じずにはいられない。

この私が今、
ここにいさせてもらうことができる
。その恩の膨大さに、
頭が下がる。

目次

contents

教化委員会ニュース	3
帰敬式執行に関する講習会レポート	4
親鸞の鼓動・七 「選択集」に学ぶ	6
教区アラカルト 親鸞聖人講座	8
子どもたちとやってみよう／コラム	10
アトリエしゃらりん	11
ちよつといこか／しゃらりんちゃん	12

恩

文 難波教行
書 畠中幸代

形声。意符の心と音符の因（いたむ心の意）
とから成る。いたみあわれる意。ひいて、「い
つくしむ」意に用いる。

『角川大辞源』より

教化委員会ニュース

教区同朋大会記録誌を発行

教区出版会議では昨年12月に、第37回大阪教区同朋大会記録誌を発行し、12月末に参加者数分を全寺院に配布いたしました。

今回は従来の講演のみの収録から体裁を変え、同朋大会の「記録誌」として、養老孟司氏の講演録の他に8ページのカラーグラフィア、教務所長・行事部幹事のあいさつ等を掲載しました。他にも組同朋大会紹介ビデオのシナリオやアンケート結果などの資料も充実させています。

今後の教化委員会の主な事業

【聖典講座】

「親鸞の思想」『教行信証』「化身土巻」に学ぶ（第2回目）

- ・日時 3月10日（月） 午後6時から
- ・会場 教区教化センター会館研修室
- ・講師 藤場俊基氏（金沢教区常讃寺）

【得度準備講習会】

- ・期間 3月26日（水）～28日（金）
- ・会場 教区教化センター会館研修室・難波別院
- ・受講料 5000円

【組門徒会員研修大会】

- ・期日 3月29日（土）
- ・会場 御堂会館大ホール
- ・対象 組門徒会員他

【ボランティア講座】

- ・期日 4月4日（金）
- ・会場 教区教化センター会館研修室

【部落差別問題に学ぶ講座】

- ・日時 4月15日（火） 午後6時から
- ・会場 教区教化センター会館研修室
- ・講師 片山寛隆氏（三重教区相願寺）

【ハンセン病に関する映画上映とお話のつどい】

- ・期日 5月7日（水）
- ・会場 難波別院同朋会館講堂

【推進員研修大会】

- ・期日 5月10日（土）
- ・会場 御堂会館大ホール
- ・講師 宮戸道雄氏（京都教区慶照寺）
- ・対象 推進員・住職・「守族」

【門徒女性と坊守の集い研修会】

- ・期日 5月22日（木）
- ・会場 同朋会館講堂
- ・講師 川村妙慶氏（大谷派僧侶・アナウンサー）
- ・対象 門徒女性・坊守

【遠松忌法要】

- ・期日 6月21日（土）
- ・講師 尾畑文正氏（同朋大学教授）
- ・会場 第23組浄泉寺

みなさまの参加お待ちしております。お問い合わせは大阪教務所（担当・藤政）まで。

しゅらりん表紙一文字募集！

『しゅらりん』の表紙の漢字一文字と、それにまつわる「詩」を引き続き募集していきます。

採用された方には、文字を染筆いただいております。中幸代氏直筆の色紙をプレゼントいたします。

前号（15号）に採用されました黒松千鶴子さん（第27組正念寺門徒）には、採用した「歩」の色紙をプレゼントさせていただきました。

ぜひ、みなさまの思いのこもった一文字に詩を添えて、ご応募ください。

【応募要項】

漢字一文字・その文字にまつわる詩・お名前・住所・電話番号・所属寺院名を明記の上、左記まで郵送、ファックスまたはEメールでお送りください。

宛先／大阪教務所内『しゅらりん』表紙漢字一文字募集係（担当：藤政）

住所／大阪市中央区久太郎町4-1-11

電話／06-6251-4720

ファックス／06-6251-4796

Eメール／office@icho.gr.jp



「帰敬式執行に関する講習会」 レポート

さる、12月18日に教区教化委員会「儀式・法要部」と「研修・講座部」の共催による「帰敬式執行に関する講習会」が教区教化センター会館研修室と難波別院本堂を会場に開催され、33人が受講しました。

当日は、「帰敬式の意義」と題し、黒田進氏（長浜教区満立寺住職）から講義をいただき、その後会場を本堂に移し、帰敬式執行に関する実行委員の指導のもと、実習を行いました。

その時の講義要旨と、実習のレポートをお届けします。

●講義要旨

「帰敬式の意義」ということを考えてみますと、受式者にとっては真宗門徒としての出発、または誕生という言い方ができるかと思えます。

では、執行する私たちにとつての意義とは何か。すでに私たちは得度式の際におかみそりを受けております。ですから、執行する私たちの意義とは、式を通して「汝は真宗門徒であるのか」と再確認する場であ

るかと思うのです。

ですから、受式者にとつての「帰敬式の意義」というのは真宗門徒の「誕生、言うならば「原体験」です。しかし、執行するものにとつては「汝は真宗門徒であるのか」という「追体験」です。

亡くなった和田先生は「君たちは寺に住む真宗門徒なんだよ」とこういうことをたびおっしゃってくれました。私たちにあって「帰敬式の意義」とは、真宗門徒であるのかというそのことを帰敬式を通して再確認する場であると思えます。

例えば、私は自坊で日曜学校をしておりまして、子どもたちが6年生になりますと本山へ2泊3日の子ども奉仕団に参加してもらい法名をいただくということをずっと伝統のようにしています。その時に帰敬式に同席すると、子どもの姿に感動をするわけです。

あるいは門徒の方の帰敬式、推進員養成講座の後期教習での帰敬式、また数は少ないですが自坊での帰敬式、そういう場にはびたび同席してみても、仏さまの前で静かに頭を下げて合掌する姿をみますと、本当に「ようこそ」という感動を覚えるのです。



そういうことと同時に、自分自身がいかにも無自覚に得度式を受けたかということが私にとつての原体験として思い返されるのです。私たちは日常生活の中で俗名も含め、法名を意識して、自覚的になっっているかと逆に問われてくるわけです。

ですから、そういう場に参加させていただくことを通して、繰り返し繰り返し確認され、問い返されてくる場が帰敬式だと思います。

（文責・しゃらりん編集部）

●受講者の声

黒田先生の講義のあと、儀式執行の講習のため、会場を難波別院本堂へと移した。執行者・掛役の実習をする者は、北広間にて執行者は、直綴・五条袈裟、掛役は、直綴・墨袈裟、共に白服にて装束を整える。聴講のみという方々は本堂の参詣席より、儀式執行の模様をつぶさに見る。そんな様子の中、「帰敬式執行に関する実行委員会」の方々によつて儀式講習会は始まった。

帰敬式執行にあたり、最少人数で行うということを前提に執行者1人・掛役1人とというスタイルでの儀式執行を教わった。

まず、実行委員から一通りお手本を見せていただく。執行者の内陣出仕、そして掛



役の進行の仕方、執行者が法名を手に取り、外陣へと降りる。掛役の剃刀の渡し方、そして剃刀の儀。掛役が、受式者の姿勢を直すのに続いて、執行者が頭に剃刀をあてる動作や、その時に「南無阿弥陀仏」と称える念仏。そして執行のことは、法名伝達。一連の動きと進行を見せていただいた後に、今回の受講者の実践となった。参詣席から見られているという緊張もあいまって、今見せていただいた通りになかなかできない。歩くスピードや、剃刀の所作。ギコチナイと言えはその通りであるが、見ているのとやってみるとは大違いである。

ただし、今回のこの講習会の中では、実行委員の方が司会（解説）として一つの動きをその都度止めて、丁寧に解説し、どのように動けばいいのかを教えてくれた。いわゆる歌舞伎などのちよつと分かりづらいお芝居などによくある副音声的な解説と同じで、「今こうしている」「それは何故か」という風に進めてくれていた。この司会（解説）の方が全体を通して進めてくれる方法によって、本当によく分かりました理解できた。一つ一つ動きながらの説明は、一つの儀式の動きがとても合理的であり、無駄のないスムーズさを感じとれた。

この方法が全ての儀式作法の講習会に適用できるかどうかは分からないが、「帰敬式執行に関する実行委員会」の方々のアイデアと工夫が、他の儀式の講習にも使え

ば、もつと分かりやすく、またそれぞれの儀式がいかにも道理に適った動きからなっているのかということも見えてくるのではないか。

この講習を受けて帰敬式が身近になり、自坊の報恩講などでも機会があれば行ってみようと思った。

（廣瀬）

●講習会の組での開催について

本講習会は、数名の講師が会所に向いて開催いただけます（組での開催の場合は講習会のみで、講義はありませんが、事前に帰敬式の意義についての学習をおすすめします）。

その際に、組で準備いただきたいお道具は、華籠柵・広蓋・へぎ・かみそり・蘭草履です。

開催が決定いたしましたら、組長を通じて教務所までご一報くださいますようお願いいたします。なお、講師の準備の都合上、事前に会所の方にご相談させていただくことがありますのでご了承ください。

親鸞の鼓動

七百五十年の響き

七

2007年11月6日と12月4日の2回にわたり、一楽 真氏（大谷大学准教授）をお招きし、聖典講座『選択集』に学ぶ』を開催いたしました。その講座の抄録を「親鸞の鼓動・七」としてご紹介いたします。

今回は、法然上人の著書である『選択集』がどういう願いのもとに書かれたのかということをお話したいと思います。

法然上人は美作国（現在の岡山県）の武家のお生まれですが、九歳の時に地侍との争いに巻き込まれ、一家全体が焼き討ちに遭い、

父上の漆間時国さま

もその中で

「聖典講座」より

「選択集」に

学ぶ

一楽 真先生

命を落としていけません。その時に父から「敵を怨んではならない。もし怨みに思えば、いつまでも仇は尽きることがなく、平穏な世の中にはならない。だから仇をうつのではなく、怨みを超えていける道を探ねてほしい」という遺言を聞くわけです。法然上人はこの遺言をきっかけに仏門に入られたのです。

これは実は仏教の根本課題と言ってもよいのです。たとえば、法然上人が師と仰がれる善導大師の言葉で言えば、「自損損他人」といわれます。お互いに傷つけ合うことをどこで超えていくのか、そこに仏教の課題があります。決して個人的な苦しみを取り除くという話ではありません。ところが、この課題の実現がはなだ難しいのです。法然上人も比叡

山で修行に励まれますが、そのことがなかなか実現しないのです。

たとえば、戒・定・慧という三学が比叡山の修行の基本になっていきますが、法然上人は「われはこれ

三学の器ものにあらざ」という言葉を遺しておられます。戒をたもとうとしても一つとしてたもつことのできない我が身を見出したのです。お互いに傷つけ合うことを超えていくという課題は分かっているにもかかわらず、具体的な道が見えなかったと言っています。

そのような中で、法然上人が改めて出遇った言葉が、善導大師の『観経疏』に出る

一心に弥陀の名号を専念して、行住坐臥、時節の久近を問わず、念念に捨てざるをば、これを「正定の業」と名づく、かの仏願力に順ずるがゆえに。

でした。「正定の業」というのは、まさしく迷いを超えることが定まる行いということですが、それが「一心専念弥陀名号」、つまり「ただ念仏」であると言われます。

それでは、称名念仏がなぜ「正定の業」といえるのかというと、「彼の仏願に順ずるが故に」と言われます。法然上人はこの一言に出遇って涙が止まらなかったと伝えられています。正直に言うとは私はその意味がよく理解できませんでした。一



心に弥陀の名号を専念することが迷いを超える行である、なぜかと言えば阿弥陀仏の本願に順じているからだ、と言っているわけですね。そうすると阿弥陀仏が言っているから正しいというような、非常に権威的に感じたのです。お経に書いてあるから正しい、阿弥陀仏の本願だから正しいと聞こえたのです。しかし、ある先生から「彼の仏願に順ずるといふのは、対比して言えば、此の私

の思いではないということ」と教えられました。その時にはじめてわかったのです。「彼の仏願に順ずるが故に」というのは、仏道であるかないかは仏によらなければならぬという意味なのです。人間がいくら、自分のしているのは仏教だとか、自分の実践は仏道の行だと言ってみても、それは思いこみでしかないのです。

この意味で、「一心専念弥陀名号」というのは、実は阿弥陀仏が定めてくださった道であるということです。阿弥陀仏が私を念ずるならば、それによつて間違いなく迷いを超えさせようと教えている言葉なのです。私の思いが仏教を決めるのではなく、阿弥陀仏が先んじて行を与えてくださっているということが大事なわけです。それが「彼の仏願に順ずるが故に」という意味なのです。

この阿弥陀仏の心を尋ねたのが、『選択集』という「本願章」です。その中で法然上人は、迷いを超えるための行としてなぜ称名念仏が選び取られたのかを丁寧に問うておられますが、結論的には次のように述べられます。

まさに知るべし、上の諸行等を以つて本願と為したまわば、往生を得る者は少なく、往生せざる者は多からん。しかれば則ち弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を摂せんが為に、造像・起塔等の諸行を以つて、往生の本願となしたまわず、ただ称名念仏の一行をもつて、その本願となしたまえり

往生のために何かの条件を立てれば、その途端に漏れる人が出てきます。たとえば、戒律をたもつことを条件にすれば、たもてない人は漏れてしまう。布施を条件にすれば、できない人は漏れてしまう。ですから、阿弥陀仏は誰もが漏れることのない称名念仏の一行をもつて本願の行として選び取られたと押さえられるのです。ここでいう「選択」というのはいくつかの行を横並びにして、造像・起塔はできないが、称名念仏ならできるといふことではありません。簡単に安易な行ということではなく、誰にでもできるという普遍性を表しています。更に言うならば、名を称えることの大事を勧められているのです。

私たちは日頃、散漫な心でいるなことに誘惑されながら生きています。そんな私たちが「南無阿弥陀仏」と称えるところに阿弥陀仏の世界に引き戻されてくる。無量寿の世界、物差しでははかることができない世界を教えていただくことが成り立つわけです。その称名念仏こそが迷いを超えていくことが定まる行い、まさしく「正定の業」だと言っているわけです。

このように『選択集』は誰もが迷いを超えることができる、生きてはたらく仏教を明らかにしたというのが法然上人のお仕事と言えると思います。

(文責・しゅらりん編集部)

親鸞聖人講座

「親鸞聖人講座」は、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌をお迎えするにあたって、一人一人が宗祖としての親鸞聖人に出遇いなおす場となることを願いとしており、テキスト『宗祖親鸞聖人』・サブテキスト『法語から読む宗祖親鸞聖人』を用いた輪読・座談の形式にて実施いただくことを基本としています。今回は教区内の3ヶ組の取り組みをご紹介します。

第10組

10組では、昨年度、親鸞聖人講座として、『法語から読む宗祖親鸞聖人』の輪読会を3回にわたり開催しました。

今年度は、昨年度の活動を継続し、さらに新たな試みとして、『法語から読む宗祖親鸞聖人』の著者のお一人である、梶原敬一氏を講師に迎えてご講義をいただくこととなりました。

第1回は去る1月30日、茨木別院の書院で参加者16名で行われました。

講義の冒頭では、『宗祖親鸞聖人』の成り立ちに触れられ、その後、今迄に学習した一章から三章までの各法語について、お話をしていただきま

した。

後半は、座談会の形式となり、参加者からの様々な質問に答えていただきました。

特に、ご自身が小児科の医師であるということもあり、幼い命の最後を見てこられた経験から出る、命の重さ、残されたものの悲しみの大きさに関するお話は貴重なものであったと感じました。

(第10組是三寺・北川浩三)

第13組

2007年6月、組におきまして、第1回目の親鸞聖人講座を実施しました。

組内住職に講師、司会、助言とスタッフをお願いし、事前協議会を数回行い、テキストより問題点、課題を整理し、開講の運びとなりました。

今回は、講師より「親鸞聖人は何を考え、どのように生きたのか」とのテキストに基づく講話を40分していただき、学習会へと進みました。1回目ということもあり、進行が考えていたようには



↑第10組親鸞聖人講座の様子

進まず、特に座談会での語り合いではテキストの問題点からはなれ、身近な問題として、「寺族」としての日常生活のあり方や寺のあり方等へと意見が広がり、テキスト中心の学習にはなりませんでした。

今回の講座には若い「寺族」の参加も目立ち、それぞれに意見を交わす場となり、講座が定着していけば、ポイントを絞り込み、有効的な学習ができると思います。反省すべき点は、構成の甘さと座談会での意見の整理ができず、問題点の確認を明確にできなかったことです。

(第13組浄圓寺 山田武司さん)

第15組

私たち15組では、親鸞聖人講座を2007年3月10日に開き、第4回を11月17日に終えたところです。講座では、今のところ参加者が少ない中、組長さんを中心に『法語から読む宗祖親鸞聖人』を輪読しています。

第1回目の講座は、真宗学や仏教学を全く学んだことのない私が、任職方と共に参加してやっていけるのだろうか等と、色々な思いが交錯し、躊躇し参加できませんでした。第2回目から大変迷ったのですが、参加しています。元々、人前で話すことが苦手な私は緊張し、見慣れない、聞き慣れない言葉に本を音読するのもままなりません。本の内容は、難しい部分もあり、全く意味のわからない言葉も出てきます。恥ずかしいなど思

いながら、「ここはどういう意味ですか」と質問をします。こんな状態ですので、親鸞聖人の教えを身に感じ、生活をしていくことはほど遠いことかもしれない。でも歴史上の遠い存在であった親鸞聖人が、現存しておられた宗祖であり、自らの生涯をもって私たちの生活のよりどころとなる道を示してくださっていることを考えていく機会をいただいています。

(第15組本念寺 辻岡 妙さん)

親鸞聖人講座を実施した組にお聞きしたところ、次のような問題点があるとのこと意見をいただきました。そのご意見や他の組での取り組みをふまえた上で、組で親鸞聖人講座を実施する方法案をいくつかあげさせていただきました。ご参考にしていただけたら幸いです。

(しやらりん編集部)

【親鸞聖人講座を実施しての問題点】

- 任職・「寺族」同士の語り合いだとなかなか質問がしにくい。
- 参加者全員で音読したが、語り合いの要点が絞りきれなかった。
- サブテキストを読み進めるだけで、かなりの労力が必要となってくる。当日の日程を考えると事前に十分に読み込む必要があると思うが、一人で読み進めるにはやや難解。

【親鸞聖人講座実施方法案】

- 数回、「寺族」でテキスト・サブテキストを輪読し、座談をする。その後、組門徒会員研修大会や組同朋大会などで講師の前座として数名が学んだことを発表する。
- 数回、「寺族」でテキスト・サブテキストを輪読し、座談をする。その学習を踏まえ、各寺院・教会の現場に置いて門徒に法話をする。
- 数回、「寺族」でテキスト・サブテキストを輪読し、座談をする。問題点、疑問点を集約し、講師を招聘して講師と共に語り合う。
- 数回、「寺族」でテキスト・サブテキストを輪読し、座談をする。その上で寺報に使えるような形でまとめて新聞を作る。それを各寺院・教会において門徒に配布する。
- 親鸞聖人講座で学習したことを劇にする。劇にすることによって、自分たちでセリフを考えなければいけないことから、より主体的に学びを深めていく必要性が出てくる。つまり、親鸞聖人のご生涯を自分自身で表現するという大事さがある。



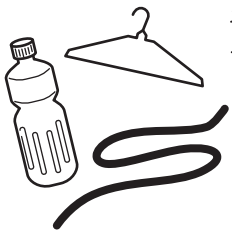
サブテキスト『法語から読む宗祖親鸞聖人』

ヨッチーの
やっどもたちと
マミヨウ!

クリフハンガー

誰も寄せつけることのない崖、登ることもできず、飛び移るしかない崖：その崖の名は「クリフハンガー」

ハンガーを人、ペットボトルを崖に見立て、ハンガーをロープに伝わせ、ペットボトルに引つ掛けるゲームです。



- ①ハンガー
- ②ロープ(2m前後)
- ③ペットボトル大(こけない程度に水を入れておく)



二人でロープを張ります。高低を調節しながらハンガーを滑らせませす。ハンガーをペットボトルに引つ掛けて落とせば成功!

成功率、もしくはタイムで勝敗をつけます。



コラム「人違い」

ある日、ぼくはいつもの月参り、クルマを停めてマンションのエレベーターホールへ向かって歩いていたら、ホールでは、幼稚園から帰ってきたばかりの子どもたちが、制服のまま走り回って遊んでいた。

よくある光景である。しかしぼくがその横を通り過ぎようとした時、そのうちのひとりの男の子が立ち止まり、目をまん丸にしてぼくを見上げたのが目に入った。

思わず何かと立ち止まるべく、その男の子はあまりの驚きに呆然とした様子のまま呟いた。「お殿さんや……」

今度はぼくが面食らう番。「えっ？」とかなんとか言ったように思う。

するとその男の子は改めて、「お殿さんって、ほんまにおつてんや……」。

ここで断っておくが、ぼくはちよんまげは結っていない。特にあの頭のとつぺんから垂直に立ち上がったちよんまげは、金欄の七条袈裟を付けていたわけでもない。そんな格好で月参りに行くやつはいない。普通の間衣・輪袈裟である。つまりほぼ真っ黒である。下の着物も地味な紺色だったし、袴もはいていない。

もちろん、「余は満足じゃ、はっはっはっ」とか高笑いしながら歩いていたら

けでもないし、後で鏡を見て確認してみたが顔も白塗りではなかったように思う。

ぼくの頭は思考停止である。今から思えば「ぼくはお坊さんなのですよ」と男の子の誤解をきちんと解いてあげるのが大谷派僧侶としての義務だったような気がするのだが、その時は何も言わずにまた歩き出してしまった。人間、思いもかけないことを思いもかけない人に突然言われると、何も言葉が出てこなくなるらしい。

我に返って笑いがこみ上げてきたのはエレベーターに乗ってからだった。「殿様に間違えられた……いくらなんでも殿様はいやろ」。

あの興奮ぶりならきつと男の子は家に帰ると早速お母さんに「さつきお殿さん見ただ！」と報告して、「そんなんおるわけないやないの！」と怒られているに違いない。それを想像したら余計に笑えた。いやぼくが誤解を解かなかつたのが悪いのだが。

しかし改めて考えてみると、あの5、6歳の男の子は「お坊さん」を知らないのだ。彼の人生において今まで出会ったことのないのだ。街で見かけたことも、テレビで見ただけのこと。親から聞いたことも。

そう思ったなら、少し怖くなった。面白がっている場合じゃないのである。(澤田)

アトリエしゃらりん



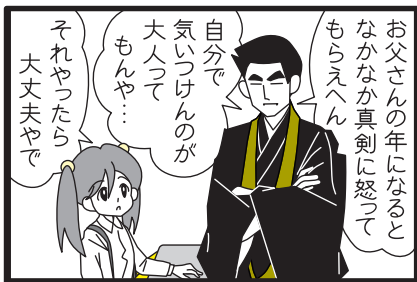
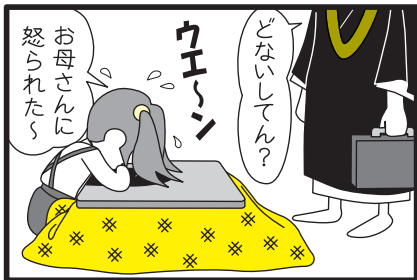
画・島中晃子



画・北川浩三

しゃらりんちゃん

叱るのも愛 編



天ぷら 介

suke

今回リサーチした一軒目の店はあるスタッフの一言で却下となり、今度こそと気合をいれて探したお店は天ぷら屋さんです。

カジュアルな雰囲気のお店構えですが、アツアツ揚げたて天ぷらにアツアツ天だし、オニおろしの大根おろしと料理はもちろん、こだわりの強さはメニューにも溢れ、読むだけでも楽しくオーダーに時間がかかってしまうほど。天ぷらは盛り合わせのほか種類ずつ紙に書いての注文もできます。今の季節やはり山菜がお勧めです。そのほか、一品料理も「備



長炭火焼き料理」「毎日朝引き桃太郎鶏の白肝のお刺身」など充実。なかでも、ゴマ油とタバスコ風味の「くせになるきゅうり」はほんまにくせになること請け合い!

ちょっと一杯のつもりでも「感動する日本酒」「焼酎」は各450円で20種類以上、ワイン、シャンパンも

あり、メニューのうまい紹介文句につられて、これもちょっと一杯飲んでみたい、人の頼んだのもちょっとお味見を、と飲み過ぎそうなのでご注意ください! ランチメニューの天井(小鉢・赤だし付き)は680円と親切。

1Fにテーブル席24席、2Fにお座敷席26席と使い勝手も良さそうですね。(難波)

御堂筋

中央大通

南御堂

[介]

大阪市中央区南久宝寺4-7-3
TEL06-6241-0404
営業時間 ● 12:00~14:00
18:00~24:00
定休日●日

編集後記

◆『しゃらりん』も早いもので創刊してもう6年です。◆その間、上のコラム「ちょっといいか」もたくさんのお店を紹介してきましたが、特に最近の南御堂界隈の変わりぶりにはびっくりします。飲食店やおしゃれな服屋さんなどが突然できたり、あるいは突然つぶれたり。しかし全体的にはほとんどのお店が増えているような感じがします。◆今回紹介したお店も、前回「ちょっといいか」に登場した時はインド料理店でした。知らない間にインド人はいなくなり、気がつくとも天ぷら屋さん。諸行無常とはまさにこのことですね(違うか)。◆ぼくもそうですが、ついつい、新しいお店を開拓するのがおっくうで、いつものお店へ行ってしまうがちです。しかしたまには御堂さんでの集まりの帰り、みなさんで新しいお店、新しいお味に挑戦してみてください。新しい発見があるかもしれません。◆というわけで、いい店見つけたら、ぜひしゃらりん編集部までご報告。(S)

発行日:2008年3月1日

発行所:真宗大谷派大阪教務所
大阪市中央区久太郎町4-1-11
TEL06-6251-4720

発行人:五辻信行

- 編集:
- 第4組 常樂寺・久世見証
 - 第9組 浄園寺・難波美千子
 - 第10組 是三寺・北川浩三
 - 第12組 清澤寺・澤田 見
 - 第17組 法観寺・廣瀬 俊
 - 第27組 願隨寺・平野圭晋
 - 第27組 信證寺・吉内利彦
 - 第27組 浄宗寺・畠中晃子

<http://www.icho.gr.jp/shararin/>